

心理的虐待の加害者への介入方法による
虐待再発率の差異

千葉県 中央児童相談所
佐名 隆徳(さめ たかのり)

自己紹介

- 高校を2度中退→自宅(横浜)を追い出されて徳島でクロス(壁紙)職人見習い→大検→大学
- 2011年3月 関西大学卒業(単位ギリギリ)
- 2011年4月～ 千葉県心理職採用
+ 2021年4月～ 筑波大学大学院生(夜間)
- 児童相談所での仕事:心理職で入ったのに、児童福祉司(虐待の初期介入)の仕事3年目(つらい)

児相職員のバーンアウトの実態

- 児相職員のバーンアウトが多い(メンタルヘルス不調による連続1か月以上の休業者が1名以上いる児相が30.3%, 退職した職員がいる児相が7.8%)
- 国の政策は「増員」だが、増員後でも↑であるため効果は限定的
- 増員以外でバーンアウトリスクを下げる方法はないか……?

仕事が減れば・・・

- 「増員して1人頭の仕事を減らそう」という考え方に限界があるなら
- 「兎相に入ってくる仕事をどうにか減らせないか」を考えてみた。
- でも新規の虐待ケースを減らす方法はさすがに無い

⇒再発ケースを減らすことはできるんじゃないか？

虐待再発の定義

- 業務量に直接影響を与える児童相談所特有の概念に「虐待再発」がある。
- 虐待の通告が入ると、虐待ケースとして児童相談所が受理する。
- 受理ケースには、新規受理と再受理ケースが存在する。新規受理とは過去に取り扱いのないケースで、再受理は過去に取り扱いがあるケース、つまり虐待対応を一旦は終結した・指導中であるものの、再度虐待が発生したケース、つまり虐待再発ケースをさす。
- 本研究では虐待再発を、「過去に取り扱っていた虐待ケースが再び通告等で受理となったケース」と定義する。

研究動機

- 心理的虐待は介入の先行研究に乏しく、心理的虐待再発の要因などは特定されていない
- 虐待受理の大半を心理的虐待が占めていることから、心理的虐待の対応を考えていくことは、虐待全体の対応の負担軽減にもつながることが期待される

⇒心理的虐待の再発率低減に寄与する因子を特定しようと思った

方法

- 千葉県のデータベースから2018年度～2019年度に対応した心理的虐待ケースを元に、再発の有無と、それらのケースの再発リスクと対応方法の関連を確認(予定)

①支援記録や意見報告に「注意喚起」「虐待と伝えた／告知した」といった文言の有無と、その文言を伝えた際の手段「訪問:hv」「電話:tel」「手紙:letter」をカウントする。

加害者に接触したが“もう喧嘩しないでね、怒鳴っちゃダメだよ”などにとどまり虐待の告知をしなかった場合は「注意喚起せず:nonotice」、加害者に全く接触せず終わったケースは「未接触:uncontact」とカウント。

方法

②再発リスクとしては先行研究などで言及されていた、初回接触が2か月以内,他扶養児童数,受理時年齢,加害者年齢,加害者性別,加害者精神症状,ひとり親,経済困窮,地域資源,過去虐待歴,親の被虐歴,親の犯罪歴,前年のDV,加害者と同居を、記録上から地道に拾い上げてカウントする。

方法

分析方法

- 2値ロジスティック回帰分析を用いる
- 従属変数を再発の有無(2値データ)、独立変数は先ほどのリスク変数+介入方法として、各独立変数の寄与度合いを確認する
- 今回は分析にあたり、佐名が自作した仮想データを用いて、①加害者に接触モデル、②加害者に未接触モデルの2モデルで検証する

結果(※仮想データです)

①接触モデル

- 「電話」「訪問」「手紙」の虐待告知群は、高い再発低減寄与度を示した
- 虐待である旨を告知しない「未介入」も再発低減に寄与しているが、虐待告知群のいずれよりも低い寄与度
- しかし、加害者との接触は、いずれの虐待再発リスク因子よりも高い絶対値の負の値を示した

接触モデル	mean	sd	2.50%	97.50%	n_eff	Rhat
電話	-4.61	1.23	-7.18	-2.37	1105	1
訪問	-3.63	0.95	-5.5	-1.86	797	1
手紙	-2.94	1.04	-5.07	-0.99	1065	1
未介入	-2.06	0.9	-3.87	-0.35	774	1
初回接触が2か月以内	1.01	0.79	-0.41	2.63	951	1
他扶養児童数	-0.15	0.21	-0.57	0.25	1893	1
受理時年齢	0.07	0.05	-0.02	0.16	1704	1
加害者年齢	-0.03	0.02	-0.07	0	1255	1
加害者性別(男:0)	0.68	0.53	-0.38	1.73	1800	1
加害者精神症状	0.82	0.53	-0.22	1.9	2005	1
ひとり親	0.34	0.61	-0.91	1.53	2708	1
経済困窮	1.41	0.68	0.01	2.71	2009	1
地域資源の乏しさ	1.14	0.52	0.12	2.13	2574	1
過去虐待歴	0.72	0.64	-0.57	1.94	2288	1
親の被虐歴	1.67	0.49	0.71	2.63	1974	1
親の犯罪歴	0.4	1.46	-2.82	2.95	2144	1
前年のDV	1.33	0.43	0.5	2.16	2042	1

結果(※仮想データです) ②未接触モデル

- 加害者と完全未接触だと、虐待再発リスクは大きく上がる
- さらに、いずれの虐待再発リスク因子よりも高い値を示した＝虐待を認知したのに加害者と接触しないことが、高い再発リスク因子となっている

未接触モデル	mean	sd	2.50%	97.50%	n_eff	Rhat
完全未接触	2.77	0.84	1.21	4.43	919	1
初回接触が2か月以内	0.69	0.76	-0.72	2.24	962	1
他扶養児童数	-0.16	0.19	-0.52	0.2	1731	1
受理時年齢	0.06	0.04	-0.02	0.14	1651	1
加害者年齢	-0.03	0.02	-0.07	0	1333	1
加害者性別(男:0)	0.6	0.45	-0.26	1.44	1372	1
加害者精神症状	0.62	0.47	-0.28	1.59	1659	1
ひとり親	0.15	0.6	-1.07	1.29	2000	1
経済困窮	1.67	0.65	0.36	2.92	1638	1
地域資源	1.06	0.46	0.2	1.96	2525	1
過去虐待歴	0.76	0.65	-0.54	2.01	2456	1
親の被虐歴	1.66	0.45	0.8	2.54	1808	1
親の犯罪歴	1.14	1.47	-2.14	3.55	1319	1
前年のDV	1.28	0.39	0.55	2.04	1781	1.01

結論例（仮想データから言えること）

- 虐待を受理したら必ず加害者に介入しましょう
- どのような形であれ接触を行い、「その行為は虐待にあたる」と、加害者自身に加害行為の認知を図りましょう
- 児相が虐待を認知したのに加害者に接触せず終わると、余計再発リスクがあがり、①児童への虐待は続き、②職員の負担も増加する

⇒その時苦しくても頑張りましょう

終わりに

- 主観まみれで感情論しか言えなかった自分が、客観性を武器に業務の提言を行えるまでになったのは、清水先生との出会いがあったからでした。
- 高校を2度中退して崖っぷち人生な気分だった自分は、清水先生に新たな生き方を教わったことで救われ、今があります。本当に感謝しています。
- 関大を退官されることは非常に寂しいですが、あと50年は生きてください。